

---

# グッバイトリガー

空無アキラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

グッバイトリガー

### 【Nコード】

N3652F

### 【作者名】

空無アキラ

### 【あらすじ】

平穏という偽りで塗り固められた世界、そこには光と闇の戦いがあった。人間の心の闇から染み出る瘴気によって生まれた 喰闇（ゼノス）、それを狩るために選ばれた戦士たちとの終わりなき戦争の中で成長していく少年少女たちを描く。

## ブローグ

戦いは常に手が届く場所にある。

なのに人はそれをまるで汚物のように敬遠し、遠ざける。

本能の内には誰でも長い年月の中で培ってきた戦闘本能があるはずだ。

でもいつの日かそれは嚴重な心理の檻に囚われ、静かに眠ってしまった。

そのため人は知らないところでいつもストレスを溜め込んでいる。

溜め込まれた黒い塊は一点に集束し、一つの存在を生み出してしまった。

暗闇（ゼノス）。

それは生きた闇。

それは死した光。

それは人間の体ではなく心に生まれる狂気を餌とする。

そのたつた一つの欲望を満たすため怪物は今も現代社会の奥底で蠢いている。

特に生息密度の高い日本には世界主要国からの援助を受けて対策本

部が設立された。

それは六花扇ろっかせんと名づけられ、日本各地に支部を置き活動している。

これは世界の命運をかけた光と闇の戦争である。

この終わりのなき戦争に終末の符を打ち込むため、平和を装う世界の裏で今日も人々は戦い続ける。

いずれ訪れるはずと夢見る平穏のために。

## ブログ（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

## 第一話：出会い 一部

眠気を払ってくれる肌を刺すような冷たい風が吹く早朝。

時刻は六時二十五分。

築三年の新築二階建ての一軒家、一階にはリビングと風呂と押入れ代わりの個室が一つ。二回には四部屋がそれぞれ向かい側に扉が顔を合わせている。

奥の右側の部屋、扉には部屋の主の名がローマ字で刻まれた札がかけられている。

室内は朝日が差し込む白いレースのカーテンがかけられた東側の窓が一つ、参考書が綺麗に並べられた勉強机、ワックスのかけられたフローリングの床。

全体的に白が並んだ部屋には暖かい雰囲気漂う。

東側の窓から差し込む朝日が部屋の隅に置かれたベッドでナマケモノのように寝そべる部屋の主に降りかかる。

瞼を痙攣させて、もう一押しで夢の世界から脱出寸前であることを教えてくれる。

トドメとばかりに枕元に置かれたアナログ目覚まし時計の大音量のベルの音。

静かな朝には付き物の目覚ましの声、ベッドの上で毛布に包まる物

体は奇妙な唸り声を上げて二ヨキと軽度の日焼けを負った手を伸ばして耳障りに白の壁紙で彩られた部屋の中を響き渡る音を止めようと振り上げる。

「うる……せ…え」

薄い意識を振り絞って握り締めた拳で音源である目覚まし時計を叩きつける。

しかし、その時計は停止するどころかベルの音には黒板を搔くような軋む音が混じる。

「あ                    あっ！    うるせえって言ってるだろうが！」

半破損した奇天烈な音の音源を今度は殴るだけじゃなく、その後に壁に投げつけるという二連コンボをかます。

中の部品が飛び散るほどに完全分解した目覚まし時計であったはずの金属の塊が床に散乱する。

同時に部屋の扉が高い怒声とともに開かれる。

「またぶっ壊したの？    いったい何回目覚まし時計買い換えれば気が済むのよ。毎回毎回壊すたびに人の眠気を邪魔するのやめてくれる！？」

「うるせえっ！    未だにそんなダサイ熊柄のパジャマ着てる単細胞女に言われたくないわ」

指摘されたパジャマは確かに今時の小学生でも喜ぶかどうか不明な

クマさんの刺繍が十数箇所施されている。

これではそう罵られるのも無理はない。

「あんたみたいなヘタレに人の趣味を罵倒する筋合いないわ！ 未だに彼女の一人もいないくせに！」

さきほどの目覚まし時計にも負けない高い声。

「誰がヘタレだあ！ おまえみたいに何股もかけてる奴と一緒にすんな！ 言つとくが俺は彼女はいないんじゃないじゃなくて作ってないだけと何回言わせればわかんだよ」

「ふん！ たしかに毎日下駄箱に溢れるほどのラブレターが詰め込まれてるみたいだけど、所詮顔だけのあんたなんかすぐに飽きられるわよ。それがわかってて誰とも付き合わないんでしょ？」

「まったくこの話蒸し返すといつもそう言う。おまえはもう少し語彙力増やしてから俺に話しかける。このミジンコ女」

「だ、誰が                  ミジ……」

今日一番の金切り声を発しようと一拍の間が置かれる。

「あんたたちい！ また朝っぱらから兄弟喧嘩？ ご近所迷惑だから止めなさいって何回言わせるの？」

その前に違う場所からの大音声が言い争っていた二人の体をビクつかせる。



部屋の外から廊下を荒く踏み鳴らす音。

金髪のカールがかかったウェーブヘアを揺らし、黒いブラが透ける白いＴシャツに下は黒のパンティだけというなんとも大胆な姿の女性。

鋭い鷹のような眼光を二人に向け、開けっ放しだった扉の前を塞ぐように仁王立ちで立っている。

「ほらあ、母さんまで起きちゃったじゃないっ！ 颯太あんたのせいよ」

「姉ちゃんのその蝉みたいな声が原因だろ？」

「誰が蝉……」

「颯太！ 奈々！ あんたたちの今日の朝飯抜きっ！」

そんなどこでもあるような静かな朝に一つまみの塩を加えたようなちよつと騒々しい朝の光景。

「ええ……！」

ため息に不満が混じった二つの声が清楚な早朝の住宅地を山びこのように木霊した。

## 第一話・出会い 一部（後書き）

更新は色々な都合で遅れますが、長い目でござん下さい。ご意見ご感想などお待ちしております。

## 第二話：出会い 二部

それから三十分後、リビングにはいつもの四人が朝食の白飯と味噌汁と卵焼きとたくあんが並んだテーブルに座していた。

「朝飯抜きじゃなかったの？」

卵焼きを頬張りながら姉、霧島奈々はそう尋ねた。

「よく考えたら、今日のご飯炊けるように予約してたから、『今日の晩御飯抜き』に変更したわ」

「ちょ、ちよつと！ 今日のは確か焼肉パーティーじゃなかったの？  
それも松坂牛の」

「そうだって！ 明日の晩御飯抜きでもいいから今日だけは勘弁してくれよ」

弟である霧島颯太も加わり、二人揃って額に冷や汗を浮かばせ、必死な表情で母親に抗議する。

「これもいい機会だ。おまえたちももうちよつと仲良くするよう心がける」

白髪が目立つ髪、ネクタイを締めたスーツ姿の父親が母親の意見に念を押す。

年が一つだけしか変わらない思春期真っ盛りの高校生兄弟に仲良くしろというほうが無理な話だろう。

「それとも……来月のお小遣い無しの方がよかったあゝ？」

呑んでいた麦茶のコップをテーブルに金槌を振り下ろすかの速度で叩き、兄弟二人を同時に睨みつける。

蛇に睨まれた蛙のごとく二人は硬直し、持っていた箸を床に落としてしまう。

「お、俺今朝練あるから、お先にっ！」

「あ、こら置いてくなあっ！」

姉の儚い断末魔も耳に入らず、ソファーに置かれたボストンバッグを引っつき、脱兎のごとく家を飛び出す。

いつもなら肌を震わせるほどの寒さに一文句言っでやるところだが、今日はむしろ汗が垂れるほどに暑かった。

もちろん、あの母親のせいであるのは間違いない。

あの目を見てしまうと数分はまともに呼吸できないくらいの効果があるようで、颯太は自宅から離れた今も胸に手を置きながら呼吸を荒げて登校している。

（あの目をみたのは一年ぶりだな）

徐々に落ち着きを取り戻してきた心臓に安堵し、これからは見せかけだけでも姉と仲良くしようと思意する颯太だった。

『朝練』というのはいわゆるも朝練習、部活の朝に行う練習である。近くには住宅街と商店街が発展する町で唯一の約二百メートルの坂道を登った高所に建つ私立渡河学園わたりががくえんは中等部と高等部があり、颯太が通う高等部にはほとんどが中等部の出身のエスカレーター式学校である。

二年G組十四番霧島颯太が所属する部活は剣道部、それも二年でありながら主将という実力を持っている。

さらに颯太は成績も学園順位は一桁という才色兼備、文武両道という言葉がぴったりの一般の女子なら放っておかない存在だった。

しかしとうの本人はその自分の異常なモテ度を生まれながら持病を患っているくらいに嫌っていた。

どうしてかこうしてか颯太は昔から女子、特に同世代の女子が苦手であった。

例外と言えば実の姉の奈々と……、

「よ、おはよっ！ そうちゃん」

学校に続く三つの坂道のうち一番急な坂道の上を絶賛登校中だった颯太の肩を軽く叩き、横に並んで挨拶するこの一人の女子くらいなのだ。

赤みがかった自然なショートヘア、真珠のように白い肌、太陽のよ

うに明るい笑顔を浮かべて颯太に向ける。

制服の胸のリボンの色が黄色であるのは颯太と同じ二年生である証だ。

「よう、椎名<sup>しいな</sup>も朝練が大変だな」

二年G組十六番椎名美代、颯太と同じく剣道部所属で腕も二年の中では実力は相当のものであるが、成績は毎回赤点寸前という能天気天然バカでもある。

だがルックスはアイドル顔負けの顔立ち、スタイルは学園一で特に胸の大きさは歩くだけで揺ら揺ら揺れ、男子生徒の目を一杯に引くほど。

さらに剣道部だけでなく二年生の中ではクラスという枠を越えたムードメーカー的存在なのだ。

「そうちゃんこそ、毎日欠かさず朝練してるんでしょ？ 私だって週三くらいしか参加しないのに」

「まあ、俺はな。それより椎名はこの前の中間テストの補習の勉強は終わったのか？」

「もちろん終わってないよ」

マンガーのように巨大な胸を張り、「えっへん」と自慢げに威張る。

当然颯太は「威張るな」と手首のスナップを利かせたツツコミを入れる。

「まったくしょうがないな。今回もそうだと思ってノート作ってたぞ」

そう言つて椎名に手渡した高校生が一般に使うノートの表紙に『バカのための補習ノート』とネームペンで記載されていた。

「ひ、ひどいよ……バカじゃないってば、ただ勉強してないだけで……」

手渡されたノートで埃を払うような軽い力で颯太の頭を連打しながら椎名は泣き叫んだ。

「それをバカだつて言ってるのがわかんないのか？ これに懲りたらもう少し真面目に勉強しろよ」

「だ、だつて……」

がつくりと首を落としてうなだれる。

「文句があるならノート没収だぞ」

いつの間にか椎名の手元に握られていたはずのノートは部活で豆だらけの颯太の手に戻っていた。

「は、はあ……ん、か、返してよ……」

取り返そうと必死に跳躍するも背丈が颯太より五センチも短い椎名には高々と伸ばされた手元にそれには届かず、間抜けなウサギのジャンプを繰り返す。

「次のテストは全教科最高記録更新できると約束するなら返してやる」

「え、そんなの無理だよ。私のお頭が空なの知っててそういうイジワル言うの？」

涙で潤う瞳を晴天に輝く太平洋の水面のように煌かせ、上目遣いで颯太の顔を覗き込む。

その表情はふさふさな毛玉のようなチワワよりも愛らしく、プロボクサーのフックが鳩尾に入ったくらい強烈だった。

「その顔は俺には効かない。そういう顔はおまえにより寄ってくる男子生徒にでもやってやれ。たぶん十人に一人くらいは心臓麻痺を起こすぞ」

「わ……私はそうちゃんしか

」

トーンが急に落ちていくその先の言葉は颯太の耳には届かず、椎名は口元をすばめてその自慢の太陽の笑顔が消えてしまった表情を伏せてしまう。

「なんか言ったか？」

「……」

「ノート返すからさ元気だせよ」

「やだ」



と言いつつ眼前に差し出されたノートをカルタ取りのように素早くひったくり、今度は奪われないようにカバンのファスナーの奥に収めた。

「補習の勉強手伝ってやるからさ」

「やだ」

頬を風船のように膨らませ、首を「ふん」と横に振る。

心なしか椎名のアスファルトを蹴る音のリズムが早くなっていくのを颯太は感じていた。

歩く速度を高めてどうにか椎名の隣に居座りながら機嫌を直そうと頭からひねり出した条件を提示する。

「じゃあ、今度買い物に付き合ってやるよ。椎名の好きなだけ俺を連れまわしてもいいからさ」

もうすぐランニングからダッシュのスピードに切り替わろうとしていたすぐ直後の事だった。

突然動いていた足を止め、沈黙すること数秒間。

「ほんと？」

アスファルトに向けられた表情の読めない顔、トーンの低い声でそう尋ねた。

「ああ、ほんとだって」

「一緒に補習の勉強手伝ってくれるの？」

「もちろん」

「今度の日曜日に一日デートしてくれる？」

「おう、もちろん」

そしてさらに沈黙の間が数秒、

「じゃあ、約束だよ」

天使の笑顔が再び光臨する。

「えへへ」

颯太もようやく肩の力を抜き安堵するが、ふと自分が了解してしまったことに違和感を覚えた。

（デート？）

鼻歌を語りながらスキップを踏む椎名の嬉しそうな表情を眺めているとそんなモヤモヤする違和感も煙草の煙のように消えてしまった。

「そうちゃん、約束だからね」

振り向きざままで海のような青空を背景に颯太に言った。

「わかってる。俺が約束破ったことあるか？」

「ない。そうちゃんが裏切らない人だってことは幼稚園のころからわかってるよ」

椎名は颯太と幼稚園以来の幼馴染で、それは小学校、中学校、そして現在の高校生にまで持ち越されているほど深い関係である。

颯太の女子が苦手になり始めたのは中学生の頃、それ以前の女友達は椎名だけだったのが現在に至っているのは言うまでもない。

「俺も椎名が底抜け、じゃなくて底なしのバカだってことはわかってる」

恥ずかしくて「笑顔が一番似合ってる」だなんて言えるはずもなく、ごまかしにいつも颯太はそう言ってしまふのだった。

「ふふ、そうだね」

それでも純粹な微笑みを浮かべて、再び鼻歌を奏で始める椎名。

足取り軽いステップでアスファルトを打つ音が加わる。

早朝の薄ら寒い気温を暖めてくれるような気持ちを感じながら颯太は寝癖のついた髪をつまみ、履き始めてから一年以上経つものにも関わらず未だ履きなれない革靴で地を踏みしめていった。

## 第二話・出会い 二部（後書き）

書けば書くほどぐたぐたな文章になっていく気がします。承知のうえで次回もご覧下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3652f/>

---

グッバイトリガー

2011年1月9日01時46分発行